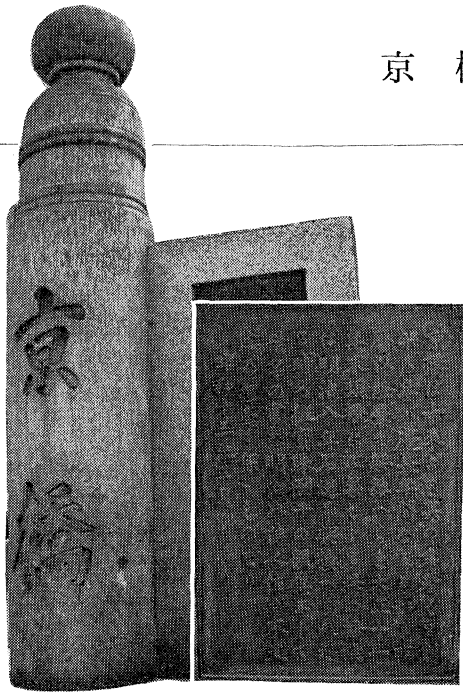


京橋の思い出

話のひろば

小池啓吉*



(カット・旧京橋のぎばしと由来書)

国鉄東海道線に沿う高速道路の末端が京橋川のところで右折し、その延長工事が目下施工されている。聞くところによれば今度京橋川が埋立てられ、江戸時代から有名であった京橋が紺屋橋などと一緒に銀座から永久に姿を消すことになるのだそうだ。全く名ごり惜しい限りである。私等が京橋の改築工事に関係したのは大正 10 年ごろで、今から約 50 年近く昔のことである。今の若い人達にはだれがあの橋を架けたのかわからないのも無理もない。わずかにあの橋につけられた橋名飯によって、ようやく関係者が判明したような次第である。当時の東京市道路局長の丹羽鋤彦さんも、技師長の竹内季一さんも、また工事係長の有元岩鶴さんも、とうに故人になられた。わずかに設計係長の谷井陽之助さんや実際設計にたずさわった浜本齊肅君と私ぐらいが生残っている。かつて設計当時は、古い新聞紙半分大の木版刷りの図面が十数枚綴ったものがあつたし、橋梁台帳も和紙に墨書きにしたものまで集めた部厚なものがあつた。

しかし、今日東京都の建設局に行ってみると何にもない。それもそのはず、この 50 年間に関東の大地震があり、さらに想像もしなかった大太平洋戦争があつて、東京がたびたび大火災に見舞われたからである。台帳や図面はあらかじめ大手町の倉庫ほか二カ所に疎開してあつたがことごとく烏有に帰し、勝鬃橋の機械室に置いたわずかのものが残っただけだ。橋梁課長の話によれば、今になってはこれらのものがどれまで複製できるか疑問

* 正会員 大木建設 KK 相談役

であるが、とにかく再調しようとい昨年から 5 年の継続事業として 10 億円の予算を要求しているが、毎年削除されているということである。そのうちだんだん古い関係者が死んで行くし、当局者は非常に気をもんでいるようである。

幸い畑中健三氏の著書（これも恐らく絶版になっているだろう）に京橋に関する記事として、つぎのようなものがあつたことを教えてくれた。すなわち、

「京橋川に架せる橋梁にして日本橋、江戸橋に対して名づけられたるものにして創建は詳かならざるもその年月は日本橋と大差なかるべし。明暦 3 年（1657）焼失のことあり、又宝暦 13 年（1763）架換え後天保 14 年（1843）12 月焼失せしを翌 15 年 4 月換架したり。其の長さ 14 間、幅 4 間 2 尺、擬宝珠には正徳元年（1711）卯年 6 月吉日御鑄物師田中丹波椽重正と銘せり、故に正徳に始めて擬宝珠を附し面目を改めしものと思はる（編集部注・原文のまま、以下おなじ）」と、またくだつて、

「明治 8 年（1875）3 月に京橋竣成し其の長さ 11 間、幅 8 間、当時の経費金 5 275 円を要したり」

と書いてある。むろん木桁橋であつたのであろう。さらに、

「明治 34 年（1901）京橋川に架設せる京橋を改造す、其の長さ 10 間、幅 10 間、中央の車道 6 間半、左右の人道各 1 間 7 分 5 厘、鋼拱橋にして工費 61 000 円を要せり」

とあり、浜本氏や私が幅員を拡張し床版をコンクリートに改造した鋼拱橋は、この明治 34 年のものであつたのであろう。古い鋼拱は高さ 24 インチで短冊形の矩形飯数片を拱形につないだものである。こんな鋼拱を 6 連 12 尺間隔に配置してあつた。明治 34 年当時拱橋を設計するといふことはなかなかハイカラな計画であつたのであろう。しかし、忌憚なくいつて設計の不安も手伝つたのか、断面積にはかなり余裕があつた。改築の骨子は当時の設計係長 谷井氏の考案にもとづいたもので、在来の鋼拱をそのまま残し（今日でもほとんど腐食していない）、12 尺の間隔の間に一連の鋼拱を、計 5 連を新たに追加して車道を支え、人道下には最外側に 18 インチの完全な円形の鋼拱を一連宛置いて、車道下の一番外側の鋼拱（人車道境界石の下にある）とて、人道および高欄回り

を支える構造とした。結局車道は幅員 60 尺、人道は各 15 尺という形になったのである。設計は主として浜本氏が担当していたが、計算の途中旧鋼拱の断面積が余って仕方がないとぼしていたものである。その結果今日見ても旧鋼拱は<ごつい>ものであるにくらべて、新たに追加したものが<ペナペナ>したもので、一見して区別ができるほどである。

そしてこの橋で最も苦心したのは、むしろ現場施工である。ご承知のとおり陸上の交通は非常に頻繁な場所である。電車はとおる、人車の往来は二六時中絶えない。しかも橋台敷には十分な余地がない。ついに両側に仮橋を設け、半分宛施工したものである。陸上はそんな状態であるが、水面の交通はそれ以上やかいかである。横断縮切りをやって京橋川の舟運を一時停止できたら少しは助かるが、これがなかなか当時は許されない。仕方がないから、これも片側施工をやって舟運を止めないようにしたものである。それでも問題になったのは、橋台の処置である。むろん計算すれば旧橋台ではもつはずがない。といて、旧橋台を掘りおこして新しく橋台をつくることは容易な業ではない。もし杭打ちでもしなければならんとなれば大事である。頭の上には仮橋があるし旧橋の鋼拱はそのまま残してある。そこで種々議論した結果、幸い地盤もよし、橋台と裏の地盤は永年の間十分になじんでいる。今さらながらこれを掘りおこして壊すにはあたるまい。極言すれば、片方は日本橋まで、片方は新橋まで橋台のようなものである。また改築した翌日から荷重が急に増加するものでもなからう。いっそのこと橋台はこのままにして置いて、新しいアーチのシューを取りつけるだけにとどめようということにし、両側の拡張部分だけの橋台を新規につくることにしたのである。その後、地下鉄銀座線が橋の直下ではないがごく近くの上流側の橋台敷に施工されても、なんらの支障がなく今日までできた。そしていよいよ京橋川が埋立てられるとなれば、京橋の使命が完了するのである。したがって、新橋、日本橋まで橋台と考えようといったへりくつも、まんざらではなかったような気がする。

つぎに橋ができ上がって一般に批判される部分は、主として親柱と高欄回りである。ところが、これを土木屋がやるとどうもあかぬけしないものになる。そこで京橋のごとき重要な橋の親柱および高欄回りは、建築屋に依頼するのである。当時の建築課長は福田重義さんといって、なかなか議論の好きな人であった。よく橋梁課にきて若いわれわれをつかまえて種々議論をふっかけられる。一日中でも何やかと話して行かれる。しかし、京橋の親柱や高欄回りの設計はなかなかできない。

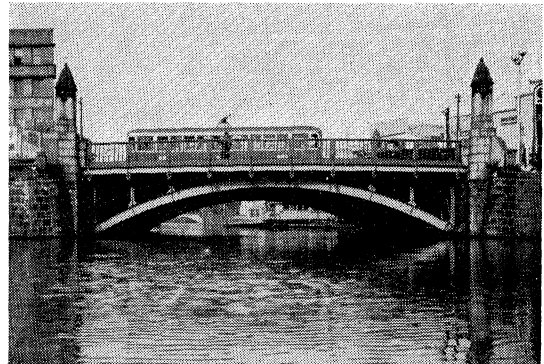
こんな場合には、われわれは 50 #/ft とか 60 #/ft と仮定して計算を進めるのである。京橋の場合も同一方針

で進んだがいよいよ建築課から届けられたものは予想外に重い（確か青銅のみで高欄の一コマが 180 貫）。しかし、今さら設計変更するわけにも行かずそのまま施工したものであるが、高欄をすえつけてひび割れなどができないかと心配したものである。

あのと時の高欄も、いつの間にか変わっている。恐らく戦争中金属供出のさい前の青銅づくりのものが供出されて、今あるちやちなものに取かえられたのであろう。

現場主任の柄内五郎氏はその後とんと消息がない。最近聞くとよれば他界されたい。非常に真面目な人であった。紅顔で筋肉質な背丈は 1.75 m ぐらいもあり、失礼ない分だが昔の見習士官という感じのする方であったが、彼氏に関して面白い記憶がある。私の友人であつただれかが、「京橋の現場主任はいつ行っても——早朝でも、夜おそくでも——あそこをとおると必ず現場の一定場所に立っている。実に不思議な男である」と話したことがある。この言葉は確かに柄内君の人となりをはうふつさせるものがある。京橋の竣工は大正 11 年 11 月で、施工は大林組であった。

大林組はわれわれのやかい橋梁工事をよく請負われた。橋台の真下に地下鉄道がとおっている万世橋の改水があつたころの京橋全景



増架されたアーチ部



築も同組の施工である。当時われわれと交渉された組の技術者は、故久保弥太郎氏であったが、京橋の現場担当者はいま記憶にない。

最後に一言蛇足を添えさせて頂きたい。今京橋がまさに消えんとしているが、今日まで日本橋があんな姿になるし呉服橋、鍛冶橋、数寄屋橋、新橋、そのほか震災復興事業で架橋され改築された橋が随分なくなったが、何だもったいない気がしてならない。たしかに外国の都市にくらべて、東京にはほり割りのような河川が多いような気がする。そうならばあらかじめ都市計画か何かで、これだけの河川は将来埋立てらるべきものだと定めて置けなかったものだろうか。地下鉄道工事という多量の残

土を生ずる工事も想像されることでもあったし、そんなことがあらかじめわかっておれば、その間架橋の必要があっても、関係者は今少しく異なった考えで処置したと思う。そんなことを思うと、ことに故人になられた米元晋一さん、花房周太郎さん、樺島正義さんに相済まない気がしてならない。諸氏はそれらの橋を例にして、いろいろなことをわれわれに指導して下さったものである。私はこれらの橋に諸氏の念妄が宿っているものと信ずる。後世の人々が簡単にこれらの橋を破壊したり、き損したりすることは、よほどつつしんで貰いたいような気がしてならない。

(1965.9.29・受付)

日本土木史完成

日本土木史——大正元年～昭和15年——がこのほど完成しました。本書は大正元年から昭和15年の30年間の土木のあらゆる部門をとりまとめたものですのでぜひご購入下さい。

体 裁：B5判 1768 ページ、特上製箱入デラックス版、図表、写真多数
定 価：12000 円
送 料：学会負担

土質工学ハンドブック

土質工学会編

編集委員長 東大生研教授 工博 星 埜 和

B5判・豪華装幀 1,400頁 定価 7,000円

発売月日 11月下旬

特別価格 6,500円

特価〆切 41年1月末日

■ 本書の特色 ■

- 最高の執筆陣を動員
土質工学会の総力を結集し、最高の執筆陣を動員した。
- 最新のデータを網羅
建設技術の進歩に則応し、広汎な内外文献、最新のデータを網羅した。
- 豊富な内容と図表
重要な図表、図版を余すところなく集録、設計施工に役立つ実用的な解説
- 土質工学の決定版
土質工学の全般に亘り、その理論と実際を一大集成了決定版

技 報 堂

東京都港区赤坂溜池5 振替東京10